

あなたへの ロータリーからの贈り物

R | 家族タスクフォース・
第一ゾーンコーディネーター
関 場 慶 博 (弘前 R C)



プロフィール

昭和25年1月20日生まれ
1976年 福島県立医大卒
小児科医、せきばクリニック院長
国際ロータリー第2830地区2000-2001年度ガバナー
国際ロータリー家族タスクフォース・
第一ゾーンコーディネーター
ガバナー会青少年交換委員会2003-2004年度委員長

去る8月25日、私は1人の患者さんの死を看取りました。63歳の女性です。お名前はK子さんといいます。K子さんは私どもの長年の友人で、「あすなろ」という名の喫茶店のオーナーでした。

今から8年前の真夜中、激しい腹痛発作に襲われ救急車で病院へ運ばれ、腸閉塞で緊急手術となりました。数日後、担当の医師がK子さんにご主人を呼び、こう話しました。

「大腸癌でした。すでに肝臓に複数の転移があり、手術は不可能です。余命は6ヶ月ほどでしょう。どうぞ残された人生をご家族と良い思い出を作りながら過ごしてください」

K子さんは、一体このお医者さんは誰の事を話しているのだろう、何かピンと来なかった。そしてだんだん腹立たしくなってきたそうです。私の体をこの医師にまかせるわけにはいかない。あと6ヶ月で死ぬなんて、納得がいけない。この医師は間違っている。そして、大学病院を訪ねますが、答えは同じでした。「抗がん剤でもやってみますか」との医師の言葉に、もうこの大学病院へも任せられないと、K子さんはご自分で東京、恵比寿にあります、免疫医療研究所の門をたたきます。そこで慶応大学のW

先生と出会う事になります。W先生は肝臓外科でたいへん高名な医師で、1週間にわたる検査の後、「K子さんこの肝臓にある癌は手術可能です」。K子さんは天にも昇る気持ちだったといいます。そして慶応大学付属病院で手術を受けます。「地元で診てくれる医師を探してください。年2回私が診察しますが、普段は地元の医師で診てもらう必要があります」。

4年前、1999年8月25日にK子さんはご主人と二人で私の診療所へやってきました。これまでの経過を聞いた私は、「K子さんはどのようになさりたいですか?」と尋ねました。そして、抗がん剤は使わない、免疫療法を行う、もし痛みが出て来たら痛みをコントロールするクスリは使う、K子さんと私の間で病気についての隠し事はしない、という決め事をし、主治医をお引き受けしました。そのとき以来、免疫療法のために1日おきに私の診療所を、お亡くなりになる直前まで、4年間訪れてきました。余命6ヶ月と言われた末期がんの患者さんが8年間生きられたのは何故なのでしょう? もちろん名医W先生との出会いもその大きな理由の一つでしょう。しかし、それ以上にK子さんを8年間生かしてくれたもの、それも生きがいの喫茶店(ギャラリーになっておりお客さんは、絵画を楽しみながらコーヒーを飲めるのです)に最後のそのときまで立ち、ベッド上での闘病生活とは無縁だった生活を送り、人生を全うしえたのは、何故だったのでしょうか?

答えは、彼女自身の明るく前向きの生き方にありました。お客様に心を込めて一つ一つお湯を注ぎながらコーヒーを入れることが、何よりの楽しみでありました。このコーヒーの美味しいこと。そしてと

ても不思議なのですが、同じコーヒー豆を使い、同じ器具を使って他の人が入れたのでは、K子さんが入れてくれるコーヒーと同じ味が出ないのです。お店に立ち、コーヒーをお客様のために入れ、そしてギャラリーに新進気鋭の作家の絵を飾って皆さんに楽しんでいただく、という生きがいを最後の最後まで持ち続けました。そして、喫茶店 20 周年を祝うという夢をもっていました。それまでは生きていたい。もう一つK子さんが生きていたい理由、それは次男の結婚式に何としても出て大役を果たすことでした。

亡くなられる 2ヶ月前、私がロータリー国際大会参加のためにプリズベンに滞在していたとき、ホテルの電話がなりました。「K子です。今日は次男の結婚式で無事役目をすべて果たす事ができました。ありがとうございます」とお礼の電話でした。K子さんはその時、発熱、全身倦怠感があり、すでに肺転移もすすみ、もしかして結婚式出席は無理ではと思われていたのです。ところが、その結婚式の日だけは朝から熱も無く、体も調子良かったというから、不思議じゃありませんか。家族の愛情に支えられ、ニコニコしながら結婚式に出ているK子さんの姿を思い描いていました。

明るく前向きな生き方、抱き続けた希望、そしてK子さんを支えた家族の愛、これがK子さんを6ヶ月と言われた人生を8年間見事に生き抜く事ができた力の源だったのだと思います。

私は主治医として何ができたのだろうか？ 何をしてあげられたのだろうか？ 実は、私がし得たことは、K子さんと一日おきにお話をしたこと（それも聞き役がほとんど）、そして彼女のために祈らせて頂いたことでした。「K子さんがこの地上での役目を終えられるそのときまで、喫茶店に立たせてくださり、間に合うならどうかご次男の結婚式での彼女の役割を全うさせてください。希望を持って最後のその日まで豊かな人生を生きられますように」。末期癌で残り半年の命と言われた、まさに絶望からの、しかし決してあきらめないK子さんの8年間の生き方に、私はただただ深い感動を覚えました。

祈るということは、何か科学者たる医師とは無縁のこのようです。また、大腸がん、肝臓と肺への転移のK子さんが6ヶ月どころか8年の充実した人生を送る事が出来た理由は、明るく前向きな彼女

の生き方と抱き続けた希望と家族の愛だといいました。実は、これは最近では、医学的にも証明されつつあるのです。前向き明るく生きている人は、癌細胞をやっつけるナチュラルキラー細胞の数が多いためです。また、新聞などにも載っていましたので、こんな実験がなされたことを知っていらっしゃる方もいらっしゃると思います。痛みがたいへん強い患者さん 200 人を抽出し、これから医療スタッフ全員があなたたちの痛みが無くなる様に祈りますと 100 人には伝えます。残りの 100 人には伝えません。その結果どうなったと思います？ これから祈りますと伝えたグループの 90% が痛みが無くなった、和らいだといったのです。エー、それは事前に伝えてあったから、たまたま痛みが和らいだのだろうと、おっしゃるかたが必ずいますよね。そこで、残りの事前に伝えられていなかったグループの結果がどうなっただろう、と皆さん興味がありますよね。痛みは全くとれませんでしたが、ではなくて、何と 80% の方は痛みが無くなった、あるいは痛みが和らいだと言ったのです。祈りは痛みを取り除く力があるのです。これは決して今までの科学、医学では説明できるものではありません。Something great と医学でも言われるようになりましたが、その something great が痛みを取り除いてくれたのでしょうか。

私が患者さんのために祈ることを教えていただいたのは、アフリカででした。1978 年から 1980 年まで 2 年間、私は女房と、10ヶ月の娘を伴い、西アフリカのガーナ共和国へ医療協力のために滞在していました。私の任務は、栄養失調の子どもたちの治療でした。赴任して間もない頃、2歳の男の子が重症の栄養失調のため病院へ運ばれてきました。高熱、腹水でパンパンに張ったお腹、小枝のようにやせ細った手足、意識も無く、典型的なマラスムスという重症の栄養失調です。

私は、病棟の主任看護婦のオードリーに、点滴の準備をするようにと指示をだしました。しかし、彼女は動こうとしません。そして悲しそうにこういいます。「この病院には、ドクター関場が指示された点滴の薬剤も、抗生物質も何もありません」「えっ、それじゃ治療が出来ないじゃないか」「それがガーナの現状なのです」

何もする事はないので、私は病棟から離れ看護詰所へ戻りました。「こりゃ、えらいところに来た

な」。しかし、オードリーは病棟からもどってきません。私はまた病室へと戻りました。そこで見たものは、意識も無くまさに死にゆく栄養失調の子どもに、米のとぎ汁をスプーンで飲ませようと必死なオードリーの姿でした。もちろん子どもは飲めるはずも無いのですが、「どうか飲んで頂戴、少しでいいから」とつぶやきながら、涙をながしながら、スプーンを口にもっていつているのです。そして、傍でおいおいと泣いている母親の肩を抱いてあげながら、その母親をも慰め励ましているのです。

治療する薬剤が無かったからと、現場を放棄した自分。薬剤がたとえなくても、米のとぎ汁を飲ませ、子どものために祈るオードリー。最近の医者は、患者を診ないで器械をみていると言われます。患者さんの心臓の音を聴診器で聴くのではなく、心電図を見ている医師の姿。まさに自分の姿でした。

医者が患者さんのために為す術が無いというのは無い、たとえ何が無くとも医者は患者さんの手を握り、患者さんのために祈る事ができる、オードリーから教わりました。私もそのベッドの脇に行き、その死に行く子どもの足をさすりながら、一緒に祈り始めたときのオードリーのあの笑顔を今も忘れる事はありません。

アフリカ滞在中も6ヶ月が過ぎた頃、私は街角で奇妙な光景に出くわします。細い路地に這って移動する物体があるのに気付きました。それが人であると分かるのにしばらくの時間を要しました。同僚に、あれはなんだいと聞くと、知らないのかという顔つきで、ポリオだよ。教科書では知っていましたが、初めて見るポリオの患者さんでした。ポリオの後遺症で下肢の神経麻痺が残り、そのため這って歩いていたのでした。日本ではすっかり無くなってしまい、ポリオワクチンという事は知っているが、ポリオの患者さんを診た事がない医師が今ではほとんどではないでしょうか。ポリオで亡くなる人もたくさんいますし、生き残っても後遺症が残る恐ろしいその病気を直接見て、私はショックを受けました。日本ではワクチンがあるのでポリオで亡くなる子どもはいませんが、ここガーナではワクチンが無いので多くの子どもが命を奪われる。何と不公平なことでしょうか。しかし、それが世界の現実なのです。日本へ帰ったら何とかしなくては、と思いながら、2年後日本へと帰ってきました。

ここで私自身のことを少しお話ししたいと思います。私は青森県で生まれ、小学校まで東京の下町で育ちました。私の父は台湾で生まれ、軍医として戦争に行き、戦後は仙台、岩手、青森、東京とあちこちを転々し、最後は現在の地、青森県藤崎町に開業医として定住しました。当時の私生活の全く無い開業医の生活の中で育ったものですから、こんなに自分の時間が無い医者には決してなるまいと思っていたのですが、なってしまいました。私どもの町はりんご農家の方がほとんどですので、朝5時頃、畑に行っただがめまいがする、と自宅の玄関を叩く患者さんがいます。夜中に腹痛で往診の依頼が飛び込みます。医者になっても決して開業医にはなるまい、と思っていましたがなってしまいました。父は嫌な顔一つせず、診察に往診にと応じていました。開業医にはなっても時間外の患者さんや夜中の往診などはすまい、と思っていましたが今は往診が楽しみになりました。不思議なものです。結局は父親の背中を見て育ち、生きて来たということでしょうか。今風に言うなら、そのようなDNAを受け継いでいた、ということでしょうか。

その父が15年前になくなりました。

私の父は台湾で生まれ、20歳代前半を戦争の中で生き、九死に一生を得て日本へ帰国。その後は、地域に溶け込んだ町医者としての生涯を全うしました。69歳で亡くなった時、診察室で患者さんを診察中だったというのも、本当に父らしい人生の最後の飾り方でした。その父は、私にどのような生き方をしろと言ったことはありません。また、戦争について語ることもありませんでした。父の死後、高校時代の同級生の方、戦友の方とお会いして、お話を聴く機会がありました。「関場君はほんとうに真面目な勉強一筋の人でした」「小さかったが剣道の選手として活躍し、突きが得意の、日頃のおとなしい関場とは思えないくらいの試合振りだった」「軍医殿はみんなに分け隔てなく親切に診てくれた」「関場軍医がいなかったら我が隊は全滅していたかもしれない」「関場軍医は現地の人たちへも親切に対応して患者さんを診てあげた。これが現地の方から米軍にも伝わり私たちの隊は丁重に扱われ、早く日本へ帰ってこれたのです」

ガバナーになってある会合に参加していたときの事です。「あなたが関場軍医殿の息子さんですか？」

と近づいて来られた方がいらっしゃいました。2570地区埼玉県は今泉バスターガバナーでした。「私は、戦争中、関場軍医殿と一緒に部隊にいました。あなたのお父様に助けられたものです」

父は死んでも生きています、と思いました。私にもそのような生き方を子どもたちに残せるでしょうか？

ロータリーは出会いだ、と言われる事がありますが、まだお会いした事のない素晴らしい人々との出会いを言うのでしょうか、一方、亡き父の戦友だった方とのいわば旧友との出会いをももたらしてくれた、それもまたロータリーの出会いなのだと、その時実感いたしました。

父がなくなった時に仏事を司ってくださったご住職がロータリアンでした。その方の誘いで弘前ロータリークラブへ入会しましたが、初めのうちは例会へ出席したものの、だんだん欠席するようになりました。クラブ例会が楽しくなかったのです。それと人間関係が、みんな平等だといいながらちゃんと年功序列の世界。確か、親睦と奉仕のロータリーと伺ったはずなのに、親睦活動は活発なのですが、奉仕活動があまりありませんでした。親睦活動も男同士の飲み会主体の親睦がほとんど。これだったら何もロータリークラブでなくとも。それならともう辞めようと思って、ほとんど例会へ出る事がなくなりました。そんなある日、1人の会員が私の診療所にやってきました。「関場さん、ちょうど近くに来たものですから、一緒に例会へ行こうと思ってお寄りしました」。こうなりますと行かざるを得ません。大幅に遅刻して会場に着きました。その日の卓話で、R財団地区委員長のポリオプラスのお話でした。ロータリーがポリオ撲滅のための奉仕活動をしている、という事を初めて知りました。その時、ガーナで見たポリオの患者さんたちと、オードリーの笑顔が浮かんできました。ポリオの悲惨さに胸のつぶれる思いをし、栄養失調の子どもたちに涙を流しともに祈ったときの、あの心は一体どこに行ってしまったのだろうか。ロータリーがつまらないという自分が傲慢だったのではないか。ロータリーをもっと知りたい、と思うようになりました。私を例会に連れ出してくださったOさんという方は、20年間例会無遅刻無欠席だというかたで、関場が最近例会に来なくなったのを心配して、わざわざ遠回りして

誘ってくださったのです。しかも、私のために無遅刻記録が無くなってしまったのです。関場さんがまた例会に来てくれるなら、俺の無遅刻記録なんてなんていうこと無いさ、とおっしゃってくださったのです。そのOさんは、私がクラブ会長だった時にお亡くなりになりました。私は彼の墓前で誓ったのです。あなたに教えていただいたロータリーのフェローシップを決して忘れませんと。

父の死がきっかけとなり、そのときのご住職だった方が、私をロータリーへ入れてくださいました。そして、不良会員だった私を例会へと再び誘ってくださったOさんが私の心にロータリーを入れてくださったのです。

お1人のロータリアンのお話をします。Sさんは、建築会社を一代で築きあげ、現在では年商50億円の企業に成長しました。Sさんは、ロータリーは職業奉仕だ。寄付団体では無いのだから寄付はしない。I Serveなんだから、みんなでポリオをなくすために団体行動するなんてとんでもない、が口癖でした。そんな中、私が2000-2001年のガバナーになりました。関場さんが地区ガバナーになるんだしたら協力するけど、持論は変えない、と言われてました。2001年1月、私どもの地区はインドでのNIDへの参加をする事になり、参加者を応募しました。その名簿の中に、なんとSさんのお名前があるではありませんか。まあ、参加者が余り少なければ関場さんが格好つかないと思ってね。Sさん一流の私への心使いでした。1月18日、青森空港。Sさんは、何と普段会社へ行く格好で飛行場に現れたのです。とてもこれからインドへ行くというスタイルではありません。職業奉仕がロータリーで、ポリオプラス奉仕活動への参加は自分の思うところではないが、関場に協力するために行くのだという、彼のこだわりの意思の表れだったのでしょうか。1月20日、インドのポリオプラス委員会が主催しての私たちの歓迎レセプションが行われました。RI、CDC、ユニセフからの担当者も多数出席していました。その時、突然ハッピーバースデーの大合唱がおきたのです。この日は私の誕生日でした。友人のヘマントさん、彼はポリオプラス委員会の委員長さんなのですが、私の誕生日を覚えていてくれて、サプライズパーティーを企画してくれたのです。私には、インドにもロータリー家族がいるのだと、ほんとうに

感動を覚えました。さて、翌日はいよいよポリオワクチンを子どもたちに投与するNIDです。1日で一億4千5百万人の子どもへワクチンを投与するのです。そのために、ボランティアが200万人動員されました。3年間にわたるこのNIDSが、インドにおけるポリオの罹患者を3万人から300人へと押し下げていました。私どもの地区からはロータリアン、ご家族、ローターアクターを含めて総勢28人が参加したのですが、3~4人の小グループに分かれて、それぞれのブース(ワクチン投与所)へとインドのロータリアンが連れて行ってくれました。Sさんは私ども夫婦と一緒にグループでした。朝9時、ワクチン投与開始です。私は小児科医ですから、最初は私からワクチンの投与を始めました。いよいよSさんの番になりました。私が赤ちゃんの頭を抑えて、Sさんがワクチンを投与するのを待ちました。ところがなかなかワクチンを落とさないのです。思わずSさんの顔を見上げました。するとどうでしょう、Sさんの目から涙がこぼれているのです。そして、ついに2滴のワクチンがその赤ちゃんの口に落とされました。これで、この赤ちゃんはポリオに罹らずにすむのです。「関場さん、私がお与えるワクチンでこの子の命が助かるのだと思ったら、もう涙が出てきて、手が震えて」「インドへ来て良かったと思います」「ロータリーは職業奉仕だけと思っていたけど、それが社会奉仕や国際奉仕へとつながっているのだなと実感しました」「これからは自分もできるだけ新世代奉仕や他の奉仕活動へも参加していきたいと思います」と言ってくださったのです。

私は、「ロータリー円連」という事を考えます。つまり、ロータリーの奉仕活動はまさに円のごとくであります。クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、新世代奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕、財団プログラム、どこから入っても良いのです。何故なら、ロータリーの道は円のごとく、どこへでも通じているのですから。今日は職業奉仕に一生懸命のロータリアンは、その根っこにおいてすべての奉仕活動へとつながっているのです。Sさんがポリオプラス活動にたどり着き、その後、財団のプログラムに興味を示され、積極的に関わるようになったように。

ジョナサン・マジリアベRI会長はロータリー家族という事を強調されております。絶望、不信、憎しみに満ちたこの時代、愛に支えられた共同体一家

族の役割の大切さを思い起こそう。ロータリーに集う人々はまさにロータリー家族のメンバーであり、お互いに大切にしよう。家族が協力しあって世のため人のために働こう。というメッセージであろうかと思えます。アトランタのロータリークラブをメイクアップしたときのことです。その日の例会は、ある方の入会式のための例会でした。丸一時間その新会員のためにだけ費やされたのです。会長が、「ジョンさん一家が入場してきます。拍手でお迎えしましょう」というアナウンスメントがあると、ドアが開きジョンさん、奥様、そして二人のお子さんの4人が入ってきました。約100人の会員は立ち上がり、盛大な拍手で迎えます。そして、メインテーブルにジョンさん一家が着席すると、スライドでジョンさんのこれまでの人生や仕事のことが紹介されたのです。その後ジョンさんのスピーチがありました。「これまでは、自分の家族のためにだけ一生懸命働いてきたが、これからは他の人のためにも自分の力の及ぶ範囲でサービスしていきたい、このような素晴らしい入会式をしていただき、ロータリークラブに入らせていただいて幸せだ」

感動の一時間でした。この入会式の感動をジョンさん、そして奥様は生涯忘れる事は無いでしょう。一方、私の入会式はというと、わずか2分でした。家族の一員としてお迎えするのですから、生涯思い出に残るような入会式をしてあげたいものです。

20世紀は科学万能の時代でした。特に世紀の後半の科学技術の発展は、人類に多くの利便性、富、豊かな生活をもたらしました。しかし、一方で環境破壊、貧富の格差、人々の心の荒廃などをもたらしたのも事実です。いわば正と負との遺産を引き継ぎながら、21世紀の扉をひらいたのが、つい2年前でした。21世紀になれば、いい時代になるのでは、との私たちの期待を木っ端微塵に砕いたのが、9月11日の同時多発テロでした。アフガン戦争、イラク戦争、イスラエル・パレスチナ問題というより戦争といったほうがいいかもしれませんが…9月11日以降の私たちの21世紀のベクトルは、ますます混迷を深める時代を指し示しているかのようです。

私たちのかけがえの無い天体—この地球に未来は無いのでしょうか？

ポールハリスは、「戦争への道は舗装されたハイウェイであるが、平和への道はでこぼこだらけの茨

特別講演

道である」と言いました。まさにその予想が残念ながら的中した今の時代です。しかし、ポールが作ったロータリーの道、その目指すところは「国際理解」と「世界平和」なのです。ロータリーの旗の下に集う私たちの奉仕活動は地味でその歩みは遅いかもしれませんが、着実に一步一步その目的地を目指して進んでいるのです。今後も一緒に歩み続けようではありませんか。

ポール・ハリスはこう言っています。「ロータリーが築かれた基礎は友情です。それより軟弱な基礎には建てることなどありえなかったでしょう」「人生の魅力の中で、友情に匹敵するものがあるでしょうか。巨万の富を有している人間でも、友人がいなくては、何とすべてが空虚なことでしょう」

そうです、ロータリーの道を歩み続けようとする私たちに勇気と励ましを与えてくれるものは、ロータリアン同士の友愛であります。そして、世界120万人のロータリアンに連なる、インターアクター、ローターアクター、青少年交換学生、財団学友、米山奨学生、そして何よりも皆様の奥様、お子様を含む、壮大なロータリーファミリーの存在です。私たちは世界平和を目指すロータリー家族です。その家族は、今、この会場にもたくさんいらっしゃいます。日本には11万人、世界には165の地域国家に120万人のロータリアンに連なる家族がいるのです。今年度、ジョナサン・マジリア会長がロータリー家族ということを強調されている事を先ほど述べました。ロータリー家族は共通の目的を持つ誰にでも開かれた家族です。これだけ大きなロータリー家族の力は、絶望、不信、憎しみに満ちた今の地球を必ずや救う大きな力になる事でしょう。何故なら、絶望には希望で、不信には協力で、憎しみには愛で応えようとするのが私たちロータリーの奉仕活動だからです。

あなたへのロータリーからの贈り物…

もう皆様は多くの贈り物をすでに受け取っておられるに違いありません。まだという方は、これから大きな贈り物を受け取ることでしょう。

ロータリー奉仕活動を通して得ることができる世界の素晴らしいロータリー家族との出会い、友愛、そして世界の子どもたちの輝く瞳と笑顔。そのよう

に私たちには、ロータリーをやっていて本当に良かった、と思える感動の瞬間があります。そうです、このかけがえの無い感動こそがあなたへのロータリーからの最大の贈り物なのです。

ほぼ一世紀に渡ってロータリーの奉仕活動は続けられてきました。しかし、私たちはまだ始めたばかりに過ぎません。皆様のそれぞれのロータリーの道を、感動を共に、どうぞ楽しみながら今後も歩み続けてください。

ご清聴ありがとうございました。

